

「ひとわらへ」考

——『源氏物語』に至ることばの展開——

A study of "hitowaraha"

—The development of literary words up to *Genji Monogatari*—

要旨

『源氏物語』には、物語の展開や登場人物の描写に深く関わる語があり、「ひとわらへ」もそのひとつである。「ひとわらへ」あるいはよく似た「ひとわらはれ」は、『源氏物語』に登場する女性の人物造型を特徴づける語として着目され、研究が重ねられてきた。それは、物語の内部の読み方に重きを置く観点からの研究である。一方で、これらの語は、『源氏物語』以前にも用例があり、和歌にも詠まれてきた語である。

本稿では、『源氏物語』の外側に目を向け、ひとつの文学用語としてその歴史的展開をたどり、『源氏物語』に至る用いられ方を和歌と仮名散文の両面から検討し、そのうえで『源氏物語』のあり方を考察する。

植田 恭代

UETA Yasuyo

はじめに

『源氏物語』には、物語場面や登場人物の描写に深く関わる重要なことばがあり、「ひとわらへ」の語もそのひとつである。「ひとわらへ」は世間の物笑いという意味の語で、受け身形の「ひとわらはれ」とともに、『源氏物語』の研究のキーワードとして着目されてきた語である。これらの語は、物語に登場する女性と深く関わりその人物造型を特徴づけるとして、『源氏物語』内部の解釈をめぐって考察が重ねられてきた。

一方で、「ひとわらへ」「ひとわらはれ」は先行作品にも用いられ、また用例数は少ないものの和歌にも詠まれてきた語である。それらの用例については、『源氏物語』の研究の側から折々にふれて言及されているが、ひとつの文学用語として歴史的展開をたどり、そちらの側から『源氏物語』に至ることはの展開を考える余地がある。

本稿では、『源氏物語』に至る「ひとわらへ」「ひとわらはれ」の語を仮名散文と和歌の観点から広くたどり、『源氏物語』に至るまでのこれらの語のあり方を明らかにし、そこから「ひとわらへ」「ひとわらはれ」をとりこんで描く『源氏物語』を照らすことを試みる。

一、『源氏物語』の「ひとわらへ」「ひとわらはれ」

「ひとわらへ」「人笑はれ」「ひとわらはれ」「人笑はれ」は、人に笑

われる、物笑いとなることを意味する語である。人というのは、特定の誰かというより、人目、世間体を意味する。日本の古典文学においては、特に『源氏物語』の研究で注目を集めてきた語である。『源氏物語』では主として内話に用いられ、特に女性の内面思考と深く関わり、登場人物たちが物笑いとなるような危機的事態を思い、それを回避するべく人生の選択をしたり、逆に自己の人生を拓こうとする場合に用いられることも多い。^② 第一部第二部の物語では、藤壺、六条御息所、紫上、明石御方などの女性たちが「ひとわらへ」を意識することによってみずからの生き方を切りひらくのに対し、宇治の大君や浮舟の場合は負の方向へ運命を紡ぐように用いられているという指摘もある。また両語の違いに分け入り、「人わらはれ」は他者に笑われること、「人わらへ」は他者が笑うことであるとする説も出されている。^③

あらためて確認すると、『源氏物語』中の用例は、「ひとわらへ」四十
二例、「ひとわらはれ」十五例である。^④ 『源氏物語』以前の用例では、『蜻蛉日記』「ひとわらへ」「ひとわらはえ」各一例、『うつほ物語』「ひとわらへ」三例「ひとわらはれ」二例、『落窪物語』「ひとわらはれ」二例、『枕草子』「ひとわらはれ」一例などである。「ひとわらへ」「ひとわらはれ」は『源氏物語』に至り、用例が著しくふえる。登場人物ごとの用例数で多いのは、鬚黒北の方と宇治の大君に「ひとわらへ」各六例、中君「ひとわらへ」四例「ひとわらはれ」二例、浮舟「ひとわらへ」六例「ひとわらはれ」二例などである。物語の傾向として、宇治の物語に登場する女性たちに用例が多く、「ひとわらへ」「ひとわらはれ」の研究が宇治

の女性論に集中するのも、こうした事情によっている。もつとも物語におけることばの重要性は数量ではかりきれられるのではなく、たとえ一例のみであつても、当該人物の重要な局面で用いられる場合もあり、藤壺や六条御息所はその典型的な例である。藤壺の場合は出産後、敵対する弘徽殿女御方の中傷をもとめせずから人生を強く切りひらく描写にあり、描かれる生涯の重要な転換点を表す。六条御息所の場合も、葵上方との車争いのち、我が身を思い知らされ苦悩を深めていくくだりにあり、それがのちに物の怪となる要因であるのは明らかである。

「ひとわらへ」「ひとわらはれ」の語については、このように『源氏物語』の側から研究が重ねられてきた経緯があるのだが、一方で、前述のとおり他作品にも用例はあり、仮名散文作品のみならず和歌にも詠まれている語である。そうした文学用語としてのあり方を前史として『源氏物語』の「ひとわらへ」「ひとわらはれ」が導かれてくる。それゆえ、『源氏物語』を考えるためにも、それ以前の「ひとわらへ」とその派生形「ひとわらはれ」を、それぞれの作品の側から個々の用例に即して検討してみることがあろう。

次章以降、『源氏物語』に至る「ひとわらへ」あるいは「ひとわらはれ」について、和歌と散文作品両方に視野を広げ、検討していくことにしたい。

二、「和歌史からみる」「ひとわらへ」「ひとわらはれ」

まず、和歌史におけるこれらの語について、いま一度目を向けてみることから始めたい。

和歌における「ひとわらへ」の早い用例は、『後撰和歌集』に確認でき、そこに「ひとわらはれ」はない。したがって、「ひとわらへ」「ひとわらはれ」は古来から定着していた誰もが知る歌語ではあり得ず、実際、歌語としての用例数も多くはない。和歌史には『万葉集』から頻繁に詠まれる歌語もあることを考えれば、『古今和歌集』でも詠まれないこれらの語は、知名度や定着度の高い歌語とは一線を画している。

しかし、一方で、村上朝に編纂された勅撰和歌集に入集する和歌に詠まれている事実は見過ごせない。梨壺の五人により編纂された第二の勅撰和歌集は、『古今和歌集』に次ぐ国家の文化事業として受けとめられた教養の範疇である。そこに初出の歌語は、定番の歌語ではなくても、『古今和歌集』以後の新しい時代を反映する歌語としてとらえられよう。

『後撰和歌集』には「ひとわらへ」を詠んだ和歌が二例ある。用例それぞれの詠歌事情を詳細にたどりみることから、歌語としての「ひとわらへ」を考えてみたい。

一例は、恋五、九〇三番歌から続く一連のよみ人しらず歌のなかにある。^⑤

女の心かはりぬべきをききてつかはしける

907 ねになけば人わらへなりくれ竹の世にへぬをだにかちぬとおもはん

『後撰和歌集』 恋五 (よみ人しらず)

詞書に記される詠歌事情によれば、これは、女性が心変わりをしてしまったようだとして聞いて、男がその女のもとへ贈った歌。一首は、もし私が泣いたりしたならば物笑いです、二人の間に何もなかったことだけでも勝ったと思ひましよう、の意。「くれ竹の」は「世」にかかり、「世」は男女の仲を表す。

このよみ人しらず歌の一首のあとには、次の歌が続く。

ふみつかはしける女のおやの伊勢へまかりければ、ともにまかりけるに、つかはしける

908 伊勢のあまと君しなりなばおなじくは恋しきほどにみるめからせよ

『後撰和歌集』 恋五 (よみ人しらず)

同じくよみ人しらずの歌の贈り主は、詞書によれば手紙を送った女。親が伊勢へ下ってしまったのでもに下った人に贈った歌という。一首は伊勢の海女とあなたがなつてしまわれたならば、同じことなら、恋しい思いを抱くいまのうちに逢わせてください、の意。九〇七番歌と並ぶと、心変わりした女に逢えず、その女が伊勢に下向してしばらく逢えなくなりそうなので逢わせてほしいという内容になる。前歌からの流れでとらえれば、そこにストーリー性が生ずる。さらに、九〇六番歌をも視野に入れば、これも九〇七番歌の「くれ竹の世」に関わる「なよ竹」「世」を詠み込んでおり、明らかに繋がっている和歌である。

女に物いふをとこふたりありけり。ひとりが返事するとききて、いまひとりがつかはしける

906 なびく方有りけるものをなよ竹の世にへぬ物と思ひけるかな

これもよみ人しらずの歌。詞書によれば女に言い寄る男が二人いた。ひとりが返事をするとききて、いまひとりが贈った歌。つまり、一人の女性をめぐって二人の男が恋心を抱き、言い寄っている。一首は、なびく人がいたというのに、あなたはまだ男女の恋などご存じないと思つていたことですよ、という意。女性をとられそうな気配に、先方の男になびきそうな女性を怨む歌である。詠み込まれたことばの関連性から、九〇六番歌と九〇七番歌は繋がりが、ある女性をめぐり二人の男性による恋の鞘当てとなりそうな状況と知られる。その一方の男性が女性にあてつけるような歌を贈り、さらにその女が心変わりをし、その女が伊勢に行くことになって、いま一度逢いたいという展開になっている。

この三首は歌物語的な様相を帯び、さらに記名歌ではなく、よみ人しらずというかたちをとることで、より一般化される。実際、九〇九・九一〇番歌の記名歌も含めて歌物語的という指摘もある。続く記名歌まであえて無記名とみなすことには無理があるが、そのような解釈まで導かれるほど、この一連の和歌にはストーリー性が認められるということでもある。このなかに、思いの叶わぬ男の「ひとわらへ」が詠み込まれる。恋のかけひきのなかでの、世間の物笑いになるから泣いたりなどしませんよ、というくらいの意である。ストーリー性のある三首は親しまれや

すいひとまとまりとなり、そのなかの「ひとわらへ」は、男の様子を表す語として、より人口に膾炙しやすい。

『後撰和歌集』には、「ひとわらへ」が詠み込まれる和歌がもう一首ある。

やまひして心ぼそしとて、大輔につかはしける

1145 よろづ世を契りし事のいたづらに人わらへにもなりぬべきかな

『後撰和歌集』雑二 藤原敦敏

これは敦敏が病氣をして心細いといつて大輔に贈った歌。一首はあなたと万世までもと約束したことがむなしくなつて、世間の物笑いになつてしまひそうですよ、という意である。藤原敦敏は清鎮公藤原実頼男、母は藤原時平の娘。天慶六年（九四三）蔵人、天慶九年（九四六）正五位下、天曆元年（九四七）没。『後撰和歌集』に二首入集する。一一四五番歌は病床で心細くなり、大輔に宛てて詠んだ歌のなかの「ひとわらへ」である。大輔は嵯峨天皇の孫で宮内卿源弼の娘。清輔本や行成筆本には「宮少将」とあり、藤原定家『倅案抄』は、敦敏ではなく「宮の少将」とするが、敦敏が「宮少将」と呼ばれたわけではなく、関係性は不明である。いま、掲出の本文にもとづいて考えると、大輔に思いを寄せていた敦敏が病に心細くなり、思いを遂げられない我が身を嘆き「ひとわらへ」になることを懸念する。このあとには、大輔の返歌が続く。

返し

1146 かけていへばゆゆしきものを万世と契りし事やかなはざるべき

『後撰和歌集』雑二 大輔

そのようなことを気にかけて言うので不吉になるのですよ、万世までと約束したことが叶わないわけはありません、という歌意。弱気な贈歌に対し、こちらは叶いますと強気で返していく。大輔は『大和物語』や『大鏡』によつて保明親王の乳母と知られ、他の男性たちにも愛された女性と知られる。⁵⁸ 大輔の詠歌は『後撰和歌集』に十六首入集し、他人の歌にその名がみえる歌がさらに十一首ある。また、『古今和歌集』にも一首入集している。一見さりげないやりとりながら、この大輔との贈答であれば、注目度は高い。

こうしてみてみると、『後撰和歌集』では「ひとわらはれ」はなくいずれも「ひとわらへ」で、その用例数は二例と少ないものの、それらは興味をそそり、人口に膾炙しやすい贈答歌にある。一例は、歌物語的なストーリー性の濃い一連の歌のなかにある、男の立場からのよみ人しらず歌。もう一例は大輔との贈答歌である敦敏の歌。それらは、決して深刻なニュアンスではなく、ごく一般的な世間の物笑いの意であり、そのようなまい、そうなりそうというくらいの意を表す語である。

勅撰集初出の「ひとわらへ」は、男性がさりげなく世間の物笑いを引き合いに出す、新しい感覚の歌語としてある。それが、勅撰和歌集という場と、その詠まれた和歌の浸透しやすさによつて、歌語としての市民

権も得ていったと考えられる。

三、『中務集』の「ひとわらへ」

『後撰和歌集』ではいずれも男性の歌であったが、「ひとわらへ」は、女性歌人中務の和歌にも用例を確認できる。中務は敦慶親王と伊勢の間の娘。出生は延喜十二年（九一二）頃かと推定され、九〇〇年代を生き、た女性歌人で『後撰和歌集』には七首入集している。その家集『中務集』に次のような和歌がある。

朱雀院の御時、うためすにたてまつる

81 いまさらにおいのたもにかすがのひとわらへなるわかなつむかな

『中務集』

詞書によれば、朱雀院の御時に、歌をもとめられて詠み献上した和歌。

一首は、いまさらながら老いの袂に人の物笑いとなる若菜、すなわち歌をさしあげることですよ、という意。若菜は長寿を祈り食されるものだが、ここでは中務の歌を謙遜して表し、そこに「ひとわらへ」が詠み込まれてくる。老齢ながら熟達した女性歌人のおくゆかしさがほとぼしるような詠みぶりである。

これは贈答歌であり、次の歌が続く。

82 御覧じて、ひげこにわかないれて少将をつかひにてたてまつる
かすがのおほくのとしはつみつれどおいせぬものはわかななりけり
御返事

83 としつめどおなじさまなるわかなにもけふだににすやあらむとすらむ

いずれも「わかな（若菜）」を詠み込む。八十二番歌は中務の歌を御覧になつての返歌で、多くの年は重ねても老いないものは若菜、すなわちあなたの歌ですね、という歌意。さらに八十三番歌はそれに対する中務の返歌で、年々摘んでも変わらぬ若菜ですけれども今日だけは違うのでしよう、という意である。歌をもとめられて謙遜する中務に、天皇が歌を褒め、中務が今日は特別と再度返すやりとりになっている。

掲出本文は西本願寺本によっているが、書陵部蔵「三十六人集」では、次のような本文である。¹⁰⁾

174 円融院の仰事にて、ふるうたたてまつりしに

175 いまさらにおいのたもにかすが野の人わらへなるわかなつむかな
これをのちにこらんして、又のとしの七日に、しろかねのこに
わかなとして、むまこの少将を御つかひにて

176 かすかのおほくのとしはつみつれとおいせぬものはわかななりけり
御返し

としつめとおなじさまなるわかなにもけふはにすやあらんとすらん

ここでは、詞書の伝える事情が少し違う。一七四番歌の詞書によれば、円融院のもとによって歌を献上し、一七五番歌の詞書では、それを円融院のちに御覧になって、翌年の七日に銀の籠に若菜を入れて、孫の少将を使いとして歌を返した、という。

さらに、『円融院御集』冒頭にも、同じ贈答歌が収められている。

中務に、歌えりてまゐらすべきよし仰せられたりける、かきて
まゐらせけるおくに書きたりける

1 いまさらにおいのたもとに春日野のひとわらへなるわかかなをぞつむ

これを、おくまでも御覽せでおかせ給てけるに、又のとし御覧
じつけて、いとあはれなりける事をと、おどろかせ給て、むま

2 このみつあきらの少将を御使にて、つかはしける

3 かすがのにおほくのとしはつみつれど老せぬものはわかかななりけり
御返し

こちらの一番歌の五句に異同があり、「わかかなをぞつむ」となっているが、一首の歌意は変わらない。一番歌の詞書には、中務に歌を選び献上する仰せがあったことが明記され、二番歌の詞書に、その家集のさいごまで御覧にならないでそのまま置いていらしたことを、それを翌年に御覧になって感じ入ったことが記される。

先の書陵部蔵本に加え、『円融院御集』にもあることから、中務に歌をもとめたのは円融天皇と判断される。円融天皇は村上天皇の子、安和二年（九六九）八月即位、永観二年（九八四）八月讓位。『中務集』に「朱雀院の御時」とあるのが不明で、朱雀天皇は延長八年（九三〇）年即位、天慶九年（九四六）に讓位ののち、天曆六年（九五二）に出家し崩御していることから、厳密に朱雀院の治世とは考えにくい。円融院を先の天皇という扱いでそう表現したという解釈もあるが、不明である。たどりみると、一番歌の詞書には、中務に歌を選んで献上するよう仰せがあったので書いて差し上げた歌とある。二番歌の詞書によれば、これをさいごまで御覧にならないでそのまま置いていらしたのを、翌年みつめてすばらしいことと感じ入りなさり、孫の光昭少将を使いとして「かすがの」の歌を贈ったという。「みつあきら」は中務の孫。父は伊尹、母は中務の子の井殿である。三番歌の二句に「わかかれは」の異同が生じるが、三首のならびと繋がりがからすれば「わかかなは」の誤りかと推定される。

この一連の贈答歌について、稲賀敬二氏は、大中臣能宣の家集に、円融天皇と花山天皇が歌人たちに家集を召したことが記されると指摘し、『小右記』の記述により孫の光昭が天元五年（九八二）四月に没していることから中務が集を献上した年を考証する根拠とし、献上を天元四年（九八三）春かそれ以前と推定する。詠歌が光昭生存中であるのは間違いないと、天元四年春以前とする推定は妥当である。参考資料とする『能宣集』冒頭には、その長い詞書に次のようなくだりがある。

それ卅一字の詠、わづかに家風をあふげといへども、万葉集のつたへすでに古賀におよびがたし、……略……円融太上法皇の在位のすゑに、勅ありて家集をめす、今上花山聖代、また勅ありておなじき集をめす、

これらの家集をつきあわせてみると、前掲の三首は、円融天皇が歌人たちに家集を召し、その時の歌ということになる。円融天皇のもとに應じて中務が献上した家集の奥に最初の中務の歌があり、のちにそれを御覧になった円融天皇が感動して返歌を贈り、また中務が返す、という贈答歌である。

天皇の命による家集の献上は、歌人たちにとつて誇らしい。中務は有名な歌人として知られる伊勢を母とし、朱雀朝末から村上朝に活躍した歌人。その中務が晩年を迎え、円融天皇のもとに應じて家集を献上し、天皇はそれを賞讃したとなれば、それはエピソードとなる。勅撰集ではないものの、『円融院御集』『中務集』それぞれにおさめられ、これらの歌は当時の社会に広く知られたと推定される。

そのなかに、熟練した女性歌人のおくゆかしさをともなう、謙辞の「ひとわらへ」がある。中務は自分の詠歌に自信がないわけではない。むしろ、相応に自負を持って献上したはずである。それをあえて、老いの身で、と謙遜してみせるところに、歌人としての並々ならぬ品格がある。一例ながら双方の家集にとられるこの「ひとわらへ」は、九〇〇年代後半の見逃し難い用例である。

四、仮名散文の「ひとわらへ」「ひとわらはれ」

たどりみてきたように、和歌史における「ひとわらへ」の用例数は少ないものの、『後撰和歌集』『中務集』『円融院御集』に「ひとわらへ」が確認でき、それぞれ、歌物語的な性格や話題性を認められる贈答歌に詠み込まれている。新しい時代の和歌に詠まれ始めた歌語の表す内容は、いずれも深刻なものではなく、軽い意味合いでの世間の物笑いや、品格さえ感じられる謙遜のおくゆかしさである。

これらは、『源氏物語』の深刻な「ひとわらへ」とは、かなり異なる。村上朝は『源氏物語』で意識される時代であり、『中務集』の用例は詠まれた時期が『源氏物語』に近づく。和歌の伝統に熟知し、巧みに和歌のことばを掬いあげていく『源氏物語』にあつて、それ以前の和歌のあり方と一線を画しているのが「ひとわらへ」の場合と言える。

では、『源氏物語』における「ひとわらへ」「ひとわらはれ」の深刻な対世間意識、あるいは恥という意識はどこから付与されてくるのだろうか。今度は仮名散文の用例をみてみよう。女性の日記文学として早い『蜻蛉日記』には次の例がある。

かくて人も仰せざらむ時、帰り出でてみたまへらむも、をこにぞあらむ。さりともしま一度はおはしなむ。それにさへ出でたまはずは、いと人笑はえになり果てたまはむ」など、ものほこりに言ひの

しるほどに、……略……

『蜻蛉日記』 中巻 二三八頁

これは天禄二年（九七一）六月、中巻のクライマックスともいべき鳴滝籠りの場面である。鳴滝から出ようとしないう作者に兼家の使者が下山を勧めて言うことばに「人笑はえ」がある。もし兼家が何もおつしやらなくなつてから帰つたならば、おかしなことになるでしょう、兼家がいま一度いらしてそれでも出なければ物笑いになり果てるでしょう、と畳みかけるように言うくだりである。「をこ」「よりさらに度合いの高い状態として、「ひとわらはえ」が用いられる。『蜻蛉日記』の「ひとわらへ」一例（二四九頁）も、これに続いて同じく鳴滝からの下山を促す手紙に用いられる。

『枕草子』には、「ひとわらはれ」が一例ある。

験だにいち早からばよかるべきを、さしもあらず、さすがに人笑はれならじと念ずる、いと苦しげなり。

『枕草子』「苦しげなるもの」二七六頁

これは、験者が人の物笑いになるまいと必死に祈っている様子を、苦しそうだという。人目を意識しての用例である。

散文の用例で、恥という意識が強くうかがえるのは『うつほ物語』である。

あやしき者の子、孫、顔かたち鬼のごとくして、頭はひた白に、腰は二重なる軀なれど、猿を後手に縛る者といへ、徳ありし者の妻ぞ、子ぞといふ者をば、天下の人もえ聞き過ごさで、いひ触れ惑ふ今の人なれば、かかる所に、一日片時、立ちとまる人もあらじと思ひて、多く徳あるよき人をも聞き過ごし、わが子をや、人笑はれに、あはあはしく思はせむ。

『うつほ物語』嵯峨の院 三六三頁

これは、仲頼があて宮に心を奪われ、親のところへ帰つた妻を母親がたしなめることばである。我が子を世間の物笑いにして軽々しく思わせまい、と言う。

「ことの近くなりたればにこそあなれ、時々ほめきし御返りも見えずなりぬるは。人笑へになしたまふな。……略……」

『うつほ物語』菊の宴 八六頁

これも会話で、春宮への入内が近づいたあて宮への歌を兼雅が祐澄に托す場面。兼雅が私を世間の物笑いにしないでください、と言うところである。

さらに、世間体を強く意識し、名譽に反するという用例が見出せる。

わが子といふもの、いと面伏せ、人笑へなるはなきがうちに、これ
はなり出でぬべく、門をも広げ、氏をも継ぐべきしも、かくあれば、
いといみじくなむ。

『うつほ物語』あて宮 一一六―一一七頁

これは、あて宮の入内が決まり落胆する仲澄に、父の正頼が、自分の
子どもたちは誰も物笑いになる者はいない、と言う場面。ここでは、名
誉に反するという意識を明らかにする「面伏せ」がともに用いられてい
る。面目ない、という恥意識が濃厚に表されているくだりである。

わがありつる時、牛車、供の用具してものしたまひつる時だに、お
ほなかりつるものを、人笑はれにて出で入りしたまふ、いと見苦し
かるらむ」など聞こえたまふ。

『うつほ物語』国譲上 三三三頁

こちらは、春宮の寵愛を得られない春宮妃の父季明が、娘に物笑いとな
って出入りなさるのは見苦しい、と言う場面。ここでは、ひどく見苦
しいという対世間意識が強く表されて結ばれている。

「われ、女子多かる中に、この子、生まれしよりらうたげなりしか
ば、懐よりといふばかりに生ほし立てて、いかでこれをだに、人並
み並みにと思ひしに、ある時は対面に面立たしき時もあり、ある時

はいとをかきき時もあり来しに、なほいかでと思ひて持たりしに、
これによりて人の怨みも負ひ、いたづらになるといふ人も聞こえ、
しひて宮仕へに出だし立てたれば、安からずうらやまはいはれし人
の、かく人笑へに恥を見むを見ては、世にも交じらふべき」とのた
まふほどに、明日になりぬ、といふ。

『うつほ物語』国譲下 三二〇頁

梨壺腹皇子の立場をきいた正頼が、藤壺(あて宮)を特別にかわいが
り育て、面目の立つ誇らしい時もあつたが、手許においておくと人の怨
みもかい空しくなつたという人の話もきいて宮仕へに出だしたところ、
妬まれ悪く言われたのに、このように物笑いとなつて恥をかくのを見て
はこの世に生きていけない、と言うくだりである。父正頼の立場から、
春宮に入内した娘の恥を思う。現在と対極の過去を「面立たしき時」と
表し、「人笑へ」は「恥を見む」に繋がっていく。名誉、恥という意識が
明確に表されている場面である。

『うつほ物語』では、特にあて宮巻以降、父親が世間の物笑いとなる
娘の恥を懸念する文脈で「ひとわらへ」「ひとわらはれ」が用いられてい
る。それらは、波線部のように、名誉や面目を気にする表現をともない、
家の父の立場から名誉や恥を強く意識する「ひとわらへ」である。

『落窪物語』では、父中納言が心を入れて造営した三条邸を衛門督に
取られて世間の物笑いになる、と嘆く場面にある。

「ここの年ごろ、ひとへに造りて、人笑はれにやなりなむとすらむ」と嘆きたまふとは、世の常なり。

『落窪物語』卷之三 二二二頁

いみじう人笑はれなるわざかな。

『落窪物語』卷之三 二二八頁

二例目も同じく邸をめぐるくだりで、地券を衛門督が買つてこのような事態になったと知り、自分がたいそう世間の物笑いになることだなあ、と嘆く。『うつほ物語』ほど強い反名誉ではないが、これらの用例も男親の対世間意識を表している。

『源氏物語』以前の作り物語では会話にあり、親の側から用いられる。特に男親の立場から名譽を意識し、それに反する恥を思う時に「ひとわらへ」「ひとわらはれ」が用いられる傾向がある。

先にみたような和歌の「ひとわらへ」があり、それとは異なる物語の用いられ方がもう一方に確認できる。こうした先駆ける用例のうえに、『源氏物語』の「ひとわらへ」「ひとわらはれ」はある。たどりみてきた用例を広く視野に入れて考えれば、『源氏物語』が和歌の「ひとわらへ」とは一線を画し、対世間意識という点では先行物語の系譜を継承しつつも、しかし、男性の強い名譽への意識から導かれる反名譽としての「ひとわらへ」ではなく、それを反転させるように女性中心に用いているのは明らかである。

『源氏物語』には、さまざまな和歌のことばが用いられ、よく知られた和歌の一節を引く引歌や、散文のなかに織りこまれた和歌に由来することばもある。そうした和歌への強い意識の一方で、「ひとわらへ」の場合は、先行和歌での用い方とは一線を画す。『源氏物語』の女性たちが思念を深め自身の生き方を考える際の「ひとわらへ」「ひとわらはれ」には、先行物語、特に『うつほ物語』が強く意識されている。それをさらに独自のことばとして表す『源氏物語』のあり方を認めることができる。

注

- (1) 大森純子「源氏物語「人笑へ」考」『名古屋大学国語国文学』(一九九一年十月)。
- (2) 鈴木日出男「人」「世」「人笑へ」『源氏物語の文章表現』(至文堂 一九九七年)。
- (3) 原岡文子「浮舟物語と「人笑へ」」『国文学』一九九三年十月 ↓ 『源氏物語の人物と表現』(翰林書房 二〇〇二年五月)。
- (4) 山本利達「人笑へ」と「人笑はれ」『むらさき』(一九九五年十二月)。
- (5) 『源氏物語』の本文ならびにその引用はすべて新編日本古典文学全集小学館による。他の作品も同様である。
- (6) 和歌の引用は原則として新編国歌大観(角川書店)による。
- (7) 『後撰和歌集注釈』(笠間書院 一九八八年)。
- (8) 『大和物語』五段、『大鏡』村上天皇・時平伝。

- (9) 稲賀敬二「浮沈・流転の歲月」『中務』（新興社 一九九九年）。
- (10) 引用は私家集大成（明治書院 一九七三年）による。
- (11) 注（9） 稲賀氏文献。
- (12) 注（9） 稲賀氏文献。稲賀氏は、「天元四年春は中務の推定年齢七十歳で、「円融天皇は「銀の籠に若菜」を盛って、中務の七十の賀を祝う贈り者としたものか。」と推定する。